



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-6-0



『ブラインド・ポイント!』

(1984年作品)
(同人誌 『粗菜獲茶』 既発表)

※「参考作品」として
2019年9月19日締切
『アイリス NEO』賞
応募予定

霧樹里守 is 土岐真扉
as
遠野真谷人

ブラインド・ポイント！

エスパッション・シリーズ vol.0

ブラインド・ポイント！

遠野 真谷 人

1.

眼前のスクリーンは、もやがかかったように見えにくかった。

深宇宙。

光点がひとつ、するすると逃げて行く。

「...ちょっとオ～！ なに、してんのよ。もっとスピード上げてっっ！」

連盟保安局の誇る高速宇宙艇のなかであたしは叫んでいた。

「無茶いうなよアリー。こっちだって精一杯やってんだぜ。」

操縦席のディームが言い反す。

「だって、逃げちゃうわよ？ 逃げちゃうっ！」

ドン！ ...ぐら。

「頼むから闇雲にコンソール、ぶっ叩かないでくれっっ！」

...やば。

操縦士連中は必死になって航路をたてなおした。

それでなくとも艇は先刻から奇妙な動き方をしている。

相手の航路を計算・予測して常に邂逅点を設定しながら最短コースを選ぶ、という宇宙空間でのセオリーを無視しきって、文字通りに、追跡する... むこうの航路をそっくりなぞっているのだ。

はやく！

と、もういちど叫びだしたいのを、かろうじてあたしはこらえた。

このあたりの星区には所々こういう場所がある。

盲目宙域（ブラインド・エアリア）。

その昔のエネルギー暴動の際の大事故のなごりなのだとかで、ばらまかれたサルテーン鉱石の粒子に重力波だか太陽からの電磁波だかが作用して、レーダーからスコープから、およそすべての艇の探査機能をマヒさせてしまうのだ。

いまの頼りは一基の船外カメラだけ。それも、バリアーにさえぎられて弾ける微小な隕石群の燃える炎で、しばしばぼうっとした紫色に曇ってしまう。

（う～～～。どうかこれいじょう大きな隕石（いし）がそこらから飛んで来ませんように！）

進むにつれ濃くなりまさるサルテーン粒子のかすかなきらめきのなか、ほとんど亜音速というトトロロしいスピードで、あたし達は決死の鬼ごっこをしているのだった。

操縦士の苦労を思いやって少しばかり（少なくとももうコンソールだけは叩くまいと）おとなしくなったあたしに、くつつつと喉で笑いながら無重力用の密封パック飲料を手渡してくれる奴がいる。

ローラー刑事だ。

「まあ、そんなに焦ってみても仕方ありませんよ、アリー警部。とにかく今は見失わないよう奴らを追尾する（つける）ことだけを考えて、ここを無事に抜けられさえしたら、それからまたあなた好みの派手な銃撃戦でも何でもやればいい。

さもないと、見つけてくれる人もないままに、永遠の漂流者になっちまいますからね。」

そうなのだ。通信器は最前までの撃ち合いであっさりおしゃかにされたまんまだし、このあたりは政府の実験宙域に指定されているとかで、他の場所なら1～2隻は見られるソルテーンの回収船も入ってはいないし…。

ここで遭難した日には誰も捜しにも来てくれない。

それでももちろんあたしは言い反した。

「よくも言えるわね。人ごとだと思って。こっちにはタイムリミットがあるのよっ！

本当なら...！」

そう。本当ならとっくの昔に奴ら、捕まえられていた、筈。

もう数週間もあたしは、とある宇宙海賊一味を追いかけていた。

あたし、地球系開発惑星連邦（テラザニア）の連邦星間警察所属、アリニカ・デュル＝セザール。

通称、"走りっぱなし"（ハリーアップ）・アリー。

いちど狙いつけたら逮捕（つかまえる）までは停まらない。

その根性を買われてこの鳥月（とりづき）に警部に昇格したばかりの、腕っこき...なのよね、これでも。

そのあたしが未だにたかが海賊船一隻、捕まえられずにいるのは、一体誰のせいなのかしら？
！

まったく...

「...うるるるるるる〜〜〜っ！」

「わ、うならないで下さい。」

ローラー刑事はおびえたようなフリはしつつ、平然と笑っていた。

「ふん。」

そりゃね、この艇で追跡をはじめてからもう10日に近いつきあいで、すっかりお馴染みのじゃれあいパターンに定着しつつあるとは言え、

...あたしがこの連中に対して本気で腹を立てているのも事実なのよ。

平然と冗談で片づけないで欲しいっ!!

(.....あ、まずい。また胃が痛くなってきた.....。)

ストレスが溜まりっぱなりよ、もう。

あたしは嘆息をついて、渡された飲料パックに注意を向けた。

.....あ〜っもう。

こんなくだらないとこにまで機械仕掛けをつけてるから、エネルギー不足になるのよ、この国は。

パック容器から吸い口（ストロー）を起こすくらい、手でやった方がよっぽど簡単でしょうがっ！

ひとくち含んで、うなる。

「.....また、おなじ味.....。ちっとも甘くないわよ、これ。」

全国一律、お茶（ティレイカ）といえば美味（あたり）不味（はずれ）もなく均一組成で出来ている文化って、どうかと思う。

あたしの故郷ではね、お茶って言えば、熱い温い、濃い薄い、その人の好みによって出し方に差があって、更に砂糖を何杯入れるかだとか、牛乳との割合はとか、気に入りの香辛料と一緒に煮立てる地方なんてのもあるし、そもそもお茶っ葉というものの種類からして、ひとつに限らず無数にあって、それで...

とにかくお茶の入れかたというのには、ティー・セレモニーって実践哲学（げいじゅつ）の分野もあるくらいで、そのひとの性格というか人柄が出るもんなんだからっ！

実用本位の高速宇宙艇だなんて限られた空間でさえなけりゃ、気分によって容器の模様なんかにも、気を配るしね。

（.....あ〜ん。ストローなんか嫌いだ。お気に入りのニャンコのカップが恋しいよオ...）

そんなような事を一瞬考えて、あたしがどっぷりホームシックにつかりきった時だった。

ローリー刑事が云った。

「そうですか？　じゃ、今度からあなたの中には糖분을0.2%ほど多くするよう、キッチンコンピューターに指示（インプット）しておきますよ。」

...え~~~~い。

死んでしまえこの唐変木（とうへんぼく）っっ!!

ぐじゃっ!

...と不吉な音をたてて、飲料パックが潰れた。

異文化。

それも、まったく共通点がない所というのなら、まだ諦めもつく。

ほとんどが不思議なほど合い似通っていて、ものすごい微妙なところで、決定的な概念のズレがあるのだ。

学生時代に言葉を習っていた頃から、それはしばしば感じていた事だけれど。

後・最終戦争期（アフター・アーマゲドン）と呼ばれる半ばは神話上の時代から、地球が現在の文明を再び築きあげるまでに一千年もの長い歳月を要した。

ようやく、"救い手"リースマリアルという、今は亡き偉大な指導者を得て地球統合政府が樹立されてから、まだ約50年。

人類の宇宙空間への進出はめざましく、統合政府は地球系開発惑星連邦...通称"連邦"（テラズ）または"地球連邦"（テラザニア）...となって、そして。

宇宙人=リスタルラーナ星間国家連盟、との公式のファースト・コンタクトから17年、経っていた。

...ふん。

しょせんはこの連中、みんな異邦人（エイリアン）さっ！

『"リスタルラーナ保安局の無能。石頭。融通きかずのストコドッコイのドカゲなみの冷血漢の、無責任の、怠慢の...ッ"』

さすがに、警部ともなると面と向かって国際紛争はひきおこせませんのよ。

あたしは小声で、郷里の言葉で悪態を並べてやった。

星間連盟（リスタルラーナ）にも地球連邦（テラズ）の共通語（第一公用語）を話せる奴はい

ないわけじゃないけど、（現にこのローリー刑事も通訳資格を持っているそうだけど）、

あたし実は少数民族の出だものね。

はるかな歴史的過去はどうあれ、ここ何十世紀というもの単一言語だけで通している連盟人（リスタルラーノ）には、ひとつひとつの惑星国家内にさえ複数の公用語が存在し、

—(方言や非公用語＝少数民族固有の言語にいたってはそれこそ無数にあり)—

ひとり3～4ヶ国語は（平均して）話せる。

（話せなけりゃ暮らしていけない）

という連邦文化の現状が理解しにくい、らしい。

『“自分ソの落度棚上げにしてよくも人のイライラを嘲（わら）えるもんだわねっ？！”』

...なんだってこのあたしが、せっかく追いつめた宙賊船が、あっさり国境を越えて連盟（リスタルラーナ）領域に逃げこんでしまえたのよ？

一体なんのためにあらかじめ警告を出して、協力を要請したと思ってるんだっ？！

それでいて、あたしにだけ警察権の相互介入は両国の友好関係にかんがみてどオのこオのと、一週間も足どめをかけるなんて、あんまりよ。

何の因果かいまだに犯人引き渡し条約だけが無いなんてっ！

...保安局のおエラがたを脅すやら、すかすやら、クビを覚悟で地球警察（こっち）の上司（ボス）とも大喧嘩をやらかして、やっとのこと特例として逮捕権を認めてもらいはした。

ものの、それもリスタルラーナ側の捜査チームの指揮をとる、という形で、呼吸（いき）のあった部下たちとは切り離されちゃうし、なんのかの言ってローリー刑事なんていう御目付役はつけてよこすし...

くすんくすんっ。

おねえさんは、とっっっても狂暴に、イジケてるんだからねっ！

ひとりぶつぶつやっていると語感だけでもあるていど言いたいことはわかるのか、ニヤニヤ面白そうに笑いながらロー刑事がまた話しかけてきた。

「恐く、ありませんか？ アリー警部。」

ふんっだ。

この態度キライよ。

人を馬鹿にしてっ

...確かに、スクリーンはもう、これでもものの役にたっているのかと思うほど紫炎がいっぱいにゆらめいて、見分けられるものと言えは前方はるかを行く敵の船の噴射管（ノズル）の輝きだけで。...

「ふっふん。事故るとしたら、奴らの方が先よ。」

あたしはすっと背筋を伸ばして応えてやった。

その為にこそ、速度を抑えてまで航路をなぞっているのだから。

「あたしを誰だと思ってるの？ 犯罪記録（きろく）と前例を探しまわるしか脳のない、連盟（リスタルラーナ）保安局の石頭刑事部長なんかと一緒にしないでほしいわ。」

~~「...もいしかして、リドー、ロイのことですか？」~~

~~「そうよ。たしか、あなたの直属上司（ボス）だったわよねえ？」~~

嫌味たっぷりに云ってやる...

やたっ。一本とったっ♪

一瞬ひるんだ様子の相手の顔を見て、あたしは内心、めいっぱいほくそ笑んだ。

10日間、はじめての反撃だもんねっ

ついでににっこりと、世にもあでやかに満面で微笑み、してみせる。

この表情（かお）ができるようになるまでは苦労したんだから。

学生時代、もと演劇部よあたし。

ローラー刑事は毒気をぬかれたのか苦笑してひきさがった。

「オーケー。あなたは連邦警察（テラズポリス）ご自慢の"はしりっぱなし"アリーだ。

その勇敢さは認めましょう？」

「あらありがと。そうね。あたしの命令に従って即座に盲目宙域に飛び込んでくれたあたりは、連盟保安局員の度胸もなかなかのものよ。」

「そりゃ、この艇の乗員（クルー）は非常部隊員（レンジャー）ですからね。平刑事の僕なんかにはとても出来ない真似で...」

すよ、とまで言わせず、その時『非常部隊』側のチーフ、主（メイン）パイロットのディームが叫んだ。

「.....うわっ！ 遂にやった...!!」

衝突（クラッシュ）。

目を射る閃光。

それはいずれはと予測されていた事態で、だけどペしゃりと前部のへしゃげてしまった奴らの船の、不自然なほどに急激なはね飛ばされかたは.....。

「うそ。何にぶつかったのよ？ それほど大きな隕石（いし）なんて見えやしな...」

爆発のショックで一時的に晴れたスクリーンに目をこらしながら、あたしは呟く。

「え！ え~~~~っ？！」

不意に、それまで何も...ぼんやり光るサルテーン粒子と称隕石塊のほかは何も...無かったはずの眼前のポイントに、

ど〜ん。

まるで間仕切りのカーテンを切って落としたとでも言いたいように、巨大な可動式宇宙基地（ベース）が現出していた。

一端が今の衝撃でゆがんでいる。

「なっ。なによなによ。なんなのよっ！」

あ、遮光式不可視バリアー。

それが壊れたんだ。

だけど、ちょっと待ってよ。

"眼"だけが唯一の頼りの、人もない盲目宙域（ブラインド・エアリア）で、なにを好き好んで、そうまで隠れなきゃいけないっていうのよ。

人目を避ける...

とすると、宇宙海賊（やつら）の仲間？

ここ、秘密基地？

本拠地（アジト）か何かなの？

「うそっ！」

こっちはたかだか9人乗りの中型艇。

船脚を生かして退却しようにも、この宙域じゃ...

...だからといってこれだけ規模の違う宇宙基地（ベース）をあいてに、勝ち目なんて全然ない

！

無茶苦茶な転針によるGのなかで、椅子にしがみつきながらとりとめもなくそんなことを考えていた。

急制動をかけるにも間にあわず、艇はその間も立ちふさがった巨体めがけて飛び続けていたのだ。

「…………だめだ。間に合わない……!!」

2度目の衝突（クラッシュ）。

そして今度はあかし達が天井に叩きつけられた。

...う.....ん.....

あたしは懸命に意識をとり戻そうとする。

...なによなによ。リスタルラーナ製のシートベルトってば、どうしてあんなにもろいのよ。あの程度の衝撃であっさりぶっちぎれ...

...うん？

この、体の下の、柔らかいものは何だろう....。

「全員、無事？ 宇宙服（スーツ）の気密を確認しなさい。...う~~っつ。」

コブ、できたわよ。これは完全に。

「大丈夫ですか、アリー？」

ヘルメットが振動して音が伝わる。

「へっ!？」

振り向いて、アセった。

投げ飛ばされたあたしを抱きとめるような格好で、壁と天井の境に体をふんばったローラー刑事が、ホールドしてくれていたのだ。

ごく淡くブラウンの入っただけの透きとおったヘルメット越し、10cm向うに彼の顔があった。

「きゃっ！ ...あ、あら。どうも有り難うっつ」

あわてて体を引き離す。...そうとして、あぶなくバランスを失うところ。

う～～む。

艇の人工重力装置、完全にいかれたな。

ディーム班長、無事で一すっ

サイト、リスト、左手首挫傷。

通信器を通して非常部隊側のメンバーが順ぐりに自己申告。

軽傷3名。あとは、無事か。

めっけもんだわね。

「...あなたは？ ま、無傷みたいね。」

そうでもないんですよ～。もろ、腰、打ちました。

「ふふん。」

よく言うわ。あたしは薄ら笑って遠慮なく眺めまわしてやった。

厚みもあるくせに瘠せて見える背恰好。

緑がかった濃い金色の短い髪。

一見温和（おとな）しげな、黒緑色の双眼。

けっこう鍛えあがた筋肉をしてる割には、たしかにやってることはトロそうに見えるのよ。

だけどその分、頭ではいったい何を考えてるものやら？

わかりゃしない。

「ディーム。被害状況報告してくれる？」

はいよ。第一外殻...と、こりゃ分解しちゃった、つうたほうが適当だなァ。

第二外殻大破。

第三...つまり、この部屋の壁だけだね。

やっぱり、どっかから空気が漏れつつある。 #

「なによ。ずい分もろいのね。未だ人間が生きてるって程度の衝撃なのに、そんなに壊れて。

...現在位置は？」

相手方の竜骨材（キール）の端にひっかかって止まっている。ついでに言うと、エンジンは未だ無事だけど、バリアー発生装置が死んだから、この宙域（ブラインド・エアリア）から這って出るってわけには行かないよ。

「ふ～ん。...ま、最悪ね。」

「どうします？」

ローラー刑事がヘルメットをくっつけてくる。

う～～～。

なによっ慣れなれしい。

このインケン抜け作がっ

あたしは壁を蹴って無重力の室内を飛びはじめた。

「船外エアロック、まだ開く？」

そこのドア出りゃもう宇宙空間さ。

「すてき。」

なにをする気です？

ローラーが追ってくる。

ヘルメットの中、自慢の真紅の髪をふりたてて、あたしはみんなを見返した。

に～～っっこり♪

白々しいほど優雅に笑う。

...おしむらくは、ヘルメットの色に半ば消されて、濃茶の瞳の輝きが半減されてしまうということよ...

「...この艇じゃ脱出できないんでしょ？」

じゃ、あちらの海賊基地、乗っ取ってやる。」

でっ！！

乗員（クルー）のひとりが叫んだ。

「みんな、武器は携行してるんでしょ？」

あたしは再びドアをめがけて泳ぎ出した。

小型艇 対 巨大ベースでは勝ち目はないかもしれない。

だけど、人間 対 人間。なら。

"走りっぱなし"アリーだって？

こういうのは、"猪突猛進"つうべきだ!!

ぼやきながら、しょせんはあたしと同じドンパチ愛好者らしいディーム班長以下「非常部隊員」（レンジャー）全員、シートの下からハンドバズーカやら何やらをひきずり出してついて来てくれた。

ローラー刑事もなにか照れかくしのような苦笑を浮かべつつ腰の銃を抜く。

ふわふわと頼りなく漂いながら、歪んで口をあけた相手方の船殻をめざした。

あたし達が追ってきた船はどちらへはじき飛ばされたものか、見えない。

大破した壁面の穴はにじみ出る補修剤にも塞ぎきれないものらしかった。

まだ十分な濃度のある空気が勢いよく流れだしてくる。

...のに混ざって、人形やら、積み木めいたものやら、どう見ても子供の玩具（おもちゃ）としか思えないシロモノが...

((なんなのよ。ここの連中はもしかして子連れで海賊やってんのかしら？))

まぬけた顔の竜のぬいぐるみをよけながら破れ目の向うを覗くと、なかはがらんどうの、まるで小学校（エレメンタリー）の体育館といった造りの、大きな球状ドームだった。

反対側、船本体に通じるエアロックの周辺で慌ただしく人数が動きまわっている。

よほど急ぐのか、気圧が下がりゆく中、まだ2～3人は気密服(スーツ)をつける余裕もないままに、どうやら最後の負傷者を運び出そうというところらしい。

別の一団は軸が歪んで役に立たなくなったエアロックをどうにかするべく、呼びかわしながら立ち働いている。

「...は、ん。...海賊風情には信じらんないほどの見事なチームワークじゃないの。」

照明はぼんやりした非常灯。重力装置は、これも故障したのか、それとも球形ドームのこととて最初から無いのかもしれない。

...やがて、隠れていたつもりなのだけれど、中のひとりがどうやらこっちの方に目をとめ、

...近づいて来てしまった！

うしろの方へ振り向いて何かしら呼ばわっている。

発見されたのよ。

なんだか向かって来ようとする全員とも海賊をやるにしては小柄にすぎる気もするけど…。

「 問答無用。 行くわよ。」

あたしは引き金を絞った。

…ほ。やるじゃないの。

何故だか敵は反撃して来なかった。

海賊島（ほんきょち）にいることとてくつろいでいたのか、武器を持って来なかったらしい。

そのかわり一斉に、算を乱しもせずに退却をはじめた。

それがまた…

実に巧みなのだ。

「 うわっ…! ?」

最初にあたし達を見咎めた奴は驚愕の声とともに体をひねってよけた。

はじめの一撃を気配だけでかわすなんて、並の反射神経じゃあ、ないわね。

で、そいつが、ぱっと他の連中の指揮をとり始めたのだ。

事故後のこととてあちこちに大きな壁材の破片が浮いている。それを楯にとらせて、縫うよう

に後方へ、後方へと、こちらの攻撃のスキをついて順送りに逃げのびさせる。

そのくせ他をかばうつもりもあってなのか、自分は前へと泳ぎ出てきておいて、あたし達がむきになって狙い撃つのを面白がっている感さえあるのだ。

まあ、実に器用によけきって見せる。

...え〜〜〜い。

殺すつもりもないけど、外すつもりだって無いんですからねっっ!!

らちがあかない。将を射るのを諦めて、他（うま）を狙った。

反撃してこないからって、騎士道精神で逃がしてやるわけにもいかない。

武器を持たせれば敵戦力になる筈の相手だもの。

基地のっとり（ベースジャック）を目論む以上、斃せる機会に数をこなしておかないと、こちらの命が危うい。

鈍い赤の火線が跳ぶ。

あたし達は逃げて行く相手を追った。

球状ドームを横切り、その先の、重力装置の効いている広い通廊を一直線に走るしかなくなった、敵を狙う。

破れ目へとめがけて流れ出してくる風が強かった。

...やっと、先行していたディームのがまず、当たった。

「きゃあっ！」

かん高い悲鳴があがり、それが女の子の声だという事にたじろぐヒマもなく、二射、三射と、誰かの撃ったものが確実な効果をあげる。

丸腰だったはずの、指揮をとっていた奴...（ここまで来ると照明もまともに生き残っていて、

染めたにしても信じられない趣味の派手な青色の髪がひとり浮きたって見えていた) ...が、どうやってなのか、ぎっと振り向いて反撃にうつった。

遠目には構えた両手に武器を握っているようには見えない...のよね。

それでもぎゃあと喚いて、非常部隊員（レンジャー）が2人、脚や腹をおさえてころがる。

「この...!!」

残り全員の銃口が一齐に青い髪の奴に向いた。

こうなれば、いくら何でも逃げられないでしょ？

.....と。

ぴたり、と、あたしの首筋に、冷たい金属の感触が押し当てられる。

銃だ。

「...そこまでにしといて欲しいんだけどね。」

ひびきのあるアルトの声の口調がごく平静なだけに、かなり、迫力があつたわよ...

「遅いぜ、サキ。」

青い髪のやつがいう。

「いつの間に!？」

ぎよっとなって振りむいて、あたしは叫んだ。

「.....ここはわたしらの船なんでね。

銃、捨ててもらえる？」

確かに... 地の利は彼女達にあったわよ。

あたしは嘆息をついて武器を投げだした。

後方では、どこからか新たに繰り出した応急修理班が、あたし達の侵入ルートでもあった壁の破れ目をふさぎ終えるところ。

...風が...

止まった。

ローラー刑事、ディーム班長、非常部隊(レンジャー)の乗員(クルー)たちと、仕方がないので全員が銃を放り出す。

すると何を考えたのか青い髪の奴がつかつかと、一番先行していたディームの眼へ歩みより...

いきなり、張り飛ばした。

「うわっ!!...」

大の男が横ざまにぶっ倒れる。

うっそオ...

だって青い髪(あいつ)、背ばかりはひょろりと高いけど、ずいぶんと瘠せて見える...

のに。

「連盟保安局に化けて来るなんざ、まったく度胸のいい真似をしてくれたじゃないか、ええ。わざわざ海賊船と鬼ごっこのフリまでして。

奈辺(どこ)の指し金だ!? それとも、おまえら自身の計画かよ。」

「へっ。...」

.....え?

「ばっくれるもんじゃないぜっ!」

ディーム、起き上がるところを、もう一発っ

「で〜〜〜っっ」

『なにをするのよっ!?!』

やっとあたしは叫んだ。

~~—かわいそうに。むこう三日は目も開けられないほど腫れるに違いない。~~

「こらこらレイっ！ またすぐ過激にはしるっ」

「.....ちゃんと素手で殴ってるだろーが。」

物騒きわまりなく光をはじく金色の瞳が不満そうに、だけどすこし和んで、あたしの後ろのコに向けられた。

「ひとりふたりブチ殺したところで文句つけるのはサキ（あんた）くらいのもんだぜ。」

どうやらリーダー格は青い髪の方ではないらしい。

レイと呼ばれた奴（の）があたし達の武装解除を手際よく確認して歩くあいだに、ホールドアップさせられたまま首をひねって、あたしは"サキ"とかいう方を睨みつけた。

女としては平均身長のあたしよりも頭ひとつばかりは背が高い。

見慣れない淡灰色の不思議な髪をふさふさした長めのポニーテールに結って、それとは別に斜めわけにした前髪が顔の左半分に深く...ほとんどあごを越すあたりまでかかって、片方の眼をうすくぼやかしている。

あでやかに光を吸いこみ放つ、右側だけの明るい灰色の瞳。

見事に均整のとれた腰細のプロポーション。

落ちつきはらって、よほど場数を踏んだらしい、毅然とした態度。

.....そうね。

これなら実際、あと10年もすれば、たいした女海賊に、それとも大頭目にだってなれるかも知れない。

だけど...

今現在、このコをどう見たっても、未だに16～17歳の小娘なのよ！

どんなに引き締まった体格を誇ろうと、頬や肩には子供こどもした線の細さが残っているじゃないのっ！！

「...う～～～っ。」

この"走りっぱなし"アリーさんが、ガキに後れをとるなんてっ！

と、あたしはよほど凄絶な顔をして睨めていたに違いない。

こういう状況下だというのに不謹慎にも、ローラー刑事が人の表情を見て吹き出した。

「...アリー...。 あなたって人は.....っ」

「...あなたも睨んであげましょうか？」

「いや...失礼...」

くっくっくっくっくっ。

...え～～～い、このっ!!

そのローラー刑事にレイとかいうのが歩み寄る。

こかがみになって笑い死んでいたローラー、その一瞬、地に沈んだと思うと、

だっ！

.....

見事な蹴りが相手の喉を狙い、次の刹那、一旦投げ出した銃が再び彼の手に握られ...

て、いた筈だったのだけれど、いかんせん、敵も負けてはいなかった。

蹴りあげた脚をタイミングでとっぱずし、瞬間速く銃把を踏まえつけている。

もっとも、ねじりあげようとしたローラー刑事の腕にはあっさり逃げられているのだから、この勝負、まずは四分六くらいで、引き分け。

「、困るなァ、お嬢さん。できれば返してほしい。」

へらへら笑いながらローラー刑事はこりた様子もなく立ち上がった。

言っているのは、銃のことではなく、素速く抜きとられて相手の手のなかにある、なにか小さなモノのことだ。

..."お嬢さん"...て、え～～！

このまっ青な髪の特大背高（せいたか）カトンボ、女だったのっ？！

...よくよく観れば確かにサキ、とかいう娘（こ）と同じ年頃の少女には違いない。

少年じみた瘠せた体格に、尊大な、いかにも一匹狼くさい態度。

右側に不自然なほどぱっと跳ね上がるクセのついた短い青い髪。

それをかきあげながら、まるでランプをでもあやつるように、"レイ"は、あたしを除く8人分の身分証明板（IDカード）を片手に広げた。

困惑。

「...おい...、なんだって本物の保安局員証（けいさつてちょう）持ってやがんだよ。...闇で出回ってる偽造モンじゃないぜ、これ。」

「？ 当たり前でしょ。その連中、保安局員なんだか...」

なにかいじくっていたと思うと、パチンと音がして、手の中でローラーの薄いカードがさらに2面に割れた。

「 あ〜〜〜。」

ローラーがうめく。

「 "特務部" ！」

レイは叫んだ。

「 おいっ！ なんだって特務部隊がこの《エスパッション》号を襲撃（おそ）わなくちゃならない?! 局長は一体何考えて生きてんだっ! 」

襟もと締めあげて派手に掴みかかる。科白の意味は不可解だけれど、それ以上のボルテージをもってして、あたしは金切り声をあげた。

「....." 特殊任務部隊 "ですってェっ?! 地球で言う情報局のことじゃないの!

ちょっと! どういうことよローラーっ!? あなた平刑事のはずじゃなかったのっ! 」

も、ほとんど絶叫、してやる。

ローラーはやのあさっての方角へ向かって下手クソな口笛を吹いた。

「...だから、困るなアって、言ったんですよ...」

「困るなアじゃありません！ どういう理由（ワケ）なの。地球連邦警察を侮辱するとっ！っ!？」

「あはん？ 連邦（テラズ）？」

自分の立場も忘れて仲間喧嘩をはじめたあたしに、背後から銃をつきつけていた"サキ"が、悠然と問いかけた。

すっ。と、形の良い腕が伸びてあたしの手首のあたりでひらひらと踊る。

...と。

本人以外には簡単には開けられない筈のリストバンドから...

「あたしのIDカードッ！」

思わず掴みかかるのへ2～3歩すばやく飛びすさって彼女はよけた。

あいかわらず銃はきっちりはこちらへ向けたままだ。

「...わたしならもすこしはマシな嘘をつきたい所だけどね。地球の警察権がリストラルーナ領域に介入してる点に関して、どう説明をつける気.....えっ?！」

..."アリニカ・デュル＝セザール、地球連邦警察所属、広域凶悪犯罪部第一課担当警部。...年齢...本籍地 "...」

おもて見て、うら見て、指先で強度を確かめてみたりして。

「...本物ですねエ、これは。」

首をかしげるなって言うのよ。まともな警察官が何の目的で偽の身分証明なぞ持って歩かなくちゃいけない？

あたしは無性に腹が立って、

「……返しなさい。」

つかつかと歩み寄ってカードをひったくってやった。

銀色に光を弾く銃口なんて、この際無視よ。

「たいしたお手並みで。宇宙海賊がスリまでやるもんだとは知らなかったわ。」

「……はん？」

青い髪と灰色の髪とが、顔を見合わせた。

「…誰が… 海賊だって？」

つんつん。

あきれたようにサキが、銃の握りの方で、人の肩をつつく。

「なにをいまさ…ら…」

下手なゴマカシをと強気に笑いとばそうとした。

だけど…

そういえばさっきも、辻褃の合わないセリフを聞いたような…

…示されるままに周囲を見渡せば。

子供たち。

8歳くらいからせいぜい13～14歳の子供たちばかりが、あたし達のいる通廊の前後にかたまって不安そうに事のなりゆきを見守っているのだ。

それは、壁面の応急修理を終えて戻ってきたのだろう連中と、先ほど、無防備なままにあたし達に銃もて追われていた一団に…

間違いはなくて。

「...あ、あははははははっ みんな、小柄なはずねっ！」

「...ここ、海賊予備軍の養成学校だったり.....しませんよねえ...。」

事の重大さと責任問題にひきつりきっているあたしに引き換え、憎らしいほどごくのほほんとして、ローラーが云った。

...と、その時...

「危ないっ！ みんな逃げなっ.....！！」

なにかの予兆を感じとったかのように、振り向いて、青い髪のレイが叫んだ。

まるでスローモーション・フィルムよ。

レイが指さした先で、応急修理されたばかりの球状ドームの壁がぺらぺらと内側にまくれこもうとしていた。

「アリー伏せてっ！」

「えっ？」

あたしの体をくるみこんでローラー刑事がだっと倒れ伏す。

ディーム達や大勢の子供達がばらばらと床に体を投げだすのが、太い腕の間から見えた。

ばっ!!

...めくれかけた壁を一押しに押しちぎる、一瞬の閃光と白熱。

爆風...

次いで逆方向へと一斉に吹き出していく空気。

ドン!!

と、鈍い二次爆発の衝撃が伝わる。

いきなり暗くなる照明。

「レイッ！ エアロックをっ！」

「オーライッ！」

あたし達が起き上がる暇もないうちにサキが言い、レイが走り。

軸がゆがんで動かなくなっていたはずの通廊のはしの扉を、ふたりはどうやってか無理にひき

ずり下ろした。

酸素の流失は鈍り、...けれどコメカミが痛くなるほどに下がってしまった気圧。

「一体、なにが...」

「はやくメットかぶんなっ！」

呆然としているあたし達にレイが怒鳴る。

「みんなっ、大丈夫?! 落ちついて... 奥へ走るんだ！」

子供たちの誘導を始めるサキ。

「あなたたちは.....」

あたしは慌てて壁の緊急時用収納箱（エマージェンシー・ロッカー）に走りよった。

カラだ。

だけど二人とも、他の子供たちと違って、最初から、簡易気密服（スーツ）すら身につけてはいないのよ。

「これをっ」

ヘルメットを外しかける。

隣でローラーも同じ動作をしていた。

事情はさっぱり判らないにせよ、万国共通、どんな子供をだって命を懸けて護るのは、警察官としての、義務だ。

「わたしらの心配はしなくていい！ 低圧訓練ぐらい受けてるよ！」

叫んで、サキはロッカーの中から工作用のプラスチック爆薬をひとかたまり、ひきづり出していた。

保護封印（シールパッケージ）をはがし、一旦閉じたエアロックに駆けよる。

ふりかえって... 廊下の反対はずれから、年下の子たちの最後のひとりまでが姿を消しきるのを確認して。

「アリニカ警部、特務部隊のおにいさん、援護射撃、お願いしたい。

行くよ、レイっ！」

ごうっっ！！

ふたたび開けられた扉から、激しい音とともに宇宙船の生命が噴出していく。

灰色の髪が生きもののようになびいて、ゆるやかに弧を描く腕の先から風の流れにまきこまれ、漆黒の宙に投げ出されて行く、淡黄色の包み...

その行く先に、高速艇の残骸に隠れた、数人の人影が。

戸口に立つサキに火線が集中する。

身をかわす彼女。

ローラーの引き金が絞られ、あたしの銃が撃つ。

その頃になって...

ようやくあたしは事態を呑みこんでいた。

あたし達の追って来た、あの海賊船。

同じくこの基地に体当たりしてしまって、やはりそのあたりを大破して漂っていた筈なのだ。

壊れた船でこの盲目宙域を脱出しようというのは自殺行為に等しく、そして、あたしに思いつける程度の発想なら、奴らの頭にも浮かばないわけがない。

この基地（ふね）を乗っかって逃げようというのだ。

先刻の爆発は、まずその手はじめにと、すでに空っぽとは知らずにあたし達の乗ってきた保安局マークの艇を破壊した、のではないかしら。

「...まだまだ、まだ...」

向かって来る火線を器用によけながら、荷物の行方を目で追ってサキが呟く。

横目で眺めるあたしの視線に気づいて、ふっと、ちょっと凄いほどの迫力ある小粋な笑顔を浮かべた。

「今度は、本物の、海賊だね？」

...ふふん。まあ.....なんて可愛げのない。

ディームが戦列に加わり、ハンドバズーカが派手な火を噴いた。

その光に照らされて、ぼろぼろに分解してしまったかつての保安局艇が見える。

残骸群の向う側へとサキの投げた「荷物」が流れつくまでは、実のところ十数秒とかかっていた。

「.....今だ。レイ。」

「了解（ラジャー）っ。」

ゆっくりと構えた銃口が50mばかりも先の小さな標的をたたく。

刹那、サキは満身の力でエアロックを引きおろしていた。

宇宙空間では音は伝わらない。

けれど、扉の向うに叩きつけるものの連続した鈍い衝撃音で、何事が起こったのかは十分察しがついた。

...きゃああああ！

このコたち... 簡易手榴弾を、即製しちゃったわねっ？！

エアロックの隙間に補修剤を使うので忙しいサキに、あたしはあくまでも軽く、だけど、銃口をつきつけかえしていた。

「たしかに海賊の仲間じゃない、てのだけは本当らしいけど。

...だからってそれよりマシなもんだとも、思えなくなってきたわ。」

「あはは。」

銃など気にもせず平然と笑う。

...シューッ...！

鈍い音がしてエア・コンディショナーから暖かい濃い空気が流れだす。

...驚いたコたちだわね...

低圧訓練だけでなく、これだけの急激な気圧変化に、なにごとにもなかったように耐えられる...
なんて。

「離しな。」

言ったのはレイだ。コンコンと彼女の銃口があたしのヘルメットを叩いた。

「...冗談よ...あくまでも。」

実は秘かに一瞬のスキを期待していたあたしは内心、舌をまく思いで、物騒なものをあっさり腰のホルスターに戻した。

めいっぱい友好的な、極上の笑みを顔には浮かべて。

「とりあえず休戦協定を結びましょうよ。敵は70人乗りの海賊船なのよ。」

この基地には、戦力になる人間はどのくらい居て？

こっちは9人だけなのだけれど、作戦行動に慣れてるから、あと30人も銃の扱えるのが居てくれれば、小班を編成して、かなり楽に...」

「 残念だけど。」

あたしの言葉をさえぎって、サキとレイは皮肉に薄笑いしながら恐ろしいことを言った。

「わたしら2人だけだね。番犬は。」

「そんな... まさか！」

さっき見たような子供たちばかり、てんじゃないでしょうね?! これだけの巨大ベースがっ！

「...こりゃあ、キツイなァ...。」

のほほんと、特務部隊員のロルーは言った。

...続く。...

"エスパッション"・シリーズ Vol.0

ブラインド・ポイント！

—連載第2回—
by遠野真谷人。

「...たしかに海賊の仲間じゃない、てのだけは本当らしいけど。

だからってそれよりマシなもんだとも思えなくなってきたわ。」

あっさり宇宙海賊（プロ）の偵察部隊7人を爆殺（かた）づけてしまったその手際のよさに内心で舌を巻きながら、あたしはあくまでも軽く、ではあるけれども、先刻のお返しとばかり、サキに銃口をつきつけかえしていた。

「あはは。」

灰色髪少女は銃など気にもとめず平然と笑ってのける。

「離しな。」

言ったのはレイだ。

物騒な金色の瞳で睨みつけながら、コンコンとばかりに人のヘルメットを銃身で叩いた。

...シューーーッ

鈍い音がしてエア・コンディショナーから一気に暖かい濃い空気が流れ出す。

...まったく驚いた娘たちだわね。

低圧馴化だけでなく、これだけの急激な気圧変化にまで、なにごとにもなかったように耐えられる、なんて。

実は秘かに一瞬のスキを期待していたあたしとしては口惜しがるというより呆れた感覚で、標準気圧まで酸素が補給されるのを確かめてヘルメットをはずし、大人しく腰のホルスターにショックガンを戻した。

「...冗談よ.....あくまでも。」

めいっぱい友好的な、極上の笑みを顔には浮かべて。

「とりあえず休戦協定を結びましょうよ。敵は80人乗りの歴戦の海賊船なのよ。この基地は、戦力いなりそんな人間はどれくらい居て？ こっちは9人だけなのだけれど、作戦行動に慣れているから...」

「7人だろ。さっき、あたしが2人たおした。1ヶ月は使いものにならんぜ、あれは。」

ぐっ。

...だめだ。相手はガキなのよ。ここで怒っちゃいけない...

とは思いつつ、腹が立つじゃあないの。

そりゃ確かに、先に海賊の仲間かと早トチリして攻撃を仕掛けたこちらが全面的に悪いわよ。

けどねえ。

レーダーから通信機からすべてが使用不能、肉眼に頼るしかないっていうこの危険至極な盲目宙域（ブラインド・エアリア）で、ことさらに不可視スクリーンまでおろして人の鬼ごっこ（カーチェイス）の進路上にうずくまっていた、そっちは何だって言うのよ。

そうまで身を隠されたら何か後ろ暗いところがあるんだって思ってしまうのは、警部として当然のことでしょうが。

人の科白にわりこむ礼儀知らずなレイは極力黙殺してやることに決めこんで、まだ少しは物の解っていそうなサキに、焦点を合わせた。

「あと40人も銃の扱えるのが居てくれれば、指揮はあたし達がとれるわ。

なんとかなると思うのよ。」

「...残念だけど。」

再度あたしをさえぎって少女（サキ）はにっこりと皮肉に微笑んだ。

「わたしら2人だけだね。この船の番犬は。」

「そんな... まさか！」

いくらリスタルラーナ社会は地球圏よりも治安がいいからって、犯罪件数がゼロってわけではないのよ！

孤立した宇宙基地であればなおさら、いざって時のための戦闘力くらい確保しておくものですよが。

それを...

この船は、いったい何なの？

さっき見た多すぎる数の無防備な子供達といい。

...子供たち。

...海賊は80人。

「こりゃあ、キツイなァ。」

人の心配を知りもせず、実にのほほんと特務部隊員のロルーは言った。

...よかったわ、サキ。無事だったのね。さっきの爆発は一体なに？

「大したことじゃないよ。それよりエリー、第2級非常態勢。研究所区の連中も残らず第1区画内に集めて。」

了解。

「被害状況はどうなってる？ それと...」

壁面の映話機（ヴィジホン）でサキはどこだかと連絡をとっている。

あたしはと云えばその傍らで、目一杯、床に八つ当たりをしていた。

「...冗談じゃないわよ！ たかだか9人.....7人で、どうやってこ〜〜んな広い所を守れて言うのよ。」

海賊（あっち）も船が壊れて盲目宙域から出られない筈なんだから。必死なのよ！？

10倍からの人数相手に白兵戦やらせるつもりっ？！」

世間ではこういう状態をヒステリーという。

「まあまあ。そうトサカに来ないでも、何とかなるもんですよ。」

「...じゃ、ロールー、あなたが"なんとか"して見せたらどうなの！

「...わはは。」

「出来もしないくせに偉そうなこと言わないでちょうだい。やれるもんならあたしが自分でとっくの昔にどうとでもしてるわよっ！」

...せめて...

せめて、ここに居るのが借りものでない、地球に残してきた、いつものあたしの捜査班（グループ）だったら。

そしたらあたし、たとえ80人が100人の敵でも、ここまで神経質になりやしないわよ？

ただどでも現実にいま居るのは、まるっきり寄せ集めの混成部隊で。少ない手勢での接近戦の不利を埋めるためには必要不可欠の、無言で通じるチームワーク、ってものが、まず、望めない。

しかもそれがひとたび船外へ出てしまえば通信器も使えないという、この盲目宙域のド真ん中でのことなのだ。

「...” う～～～っ！ みんな連邦政府が悪いのよ、こっちにはタイムリミットがあるっていうのに公式捜査権すらくれないでっっ！！”」

あたしは思わず母国語で叫んだ。

「っるせえな、ぎゃあぎゃあ喚くんじゃない！」

意味のわからない雑言はかえって気に触わるのか、怒鳴り返してきたのはレイだった。

「ガタガタしないでも誰もおたくらの手を借りようなんざ思ってもねえよ。

自分（てめえ）の船くらい自分（てめえ）で守る！」

「...へ～え、え。どうしようって言うのよ。」

腕を組んで、ひょろりとやたらに背の高い物騒な少女を睨み返す。

ふん。

わざとらしい金色のカラー・コンタクト。

「...アリー、喧嘩をする相手が違っているんじゃないですか？」

ローラーがため息をついた。

「解ってるわよ。すこし黙っててちょうだい。」

これでも一応、脳味噌は高速回転してはいるのよね。

ただ単に、さすがの"走りっぱなし"アリーさんも今度ばかりは妙策を思いつけなくて、イラついているだけで。

ふいっと人の存在を唐突に無視しきるとレイは交信中の映話（ヴィジ）に割ってはいった。

「エリー、バリアと主噴射管（メイン・ノズル）、どっちの被害が大きい？」

バリアの補修を優先してちょうだい

「オーケー。ケイを手伝いによこしてくれ。

...先に行ってるぜ。」

「頼む。」

軽く手を上げて相棒が見送るより早く、青い髪はすでに数メートル向うを走り抜けている。

それを見送って、先刻（さっき）もの見事に喰らった往復ビンタの跡も鮮やかな、ふくれた頬をさすりながらディームが呟いた。

「.....アリーに勝ってる....。.....おっかねエ姐ちゃんだぜ...」

「あのねええっ！」

どういう意味よッ？

サキが思わず吹きだして、

「じゃね、エリー。すぐにカタをつけちまうから、心配しないで。」

通話を切ると、くるりと振りむいた。

.....本当に、凄いなァと思ったのよ。一瞬。

この娘、笑ったときと、きつい表情を見せた時とでは、がらりと雰囲気が違う。

ちょっとボーイッシュなだけのごくあたりまえの知的な少女の顔から...

厳しい戦士（ソルジャー）、それも一隊の指揮官の顔へ、と。

「2人、ここへ残って。あとはこっちについて来てくれる。」

手を振ってレインジャー部隊の人数を選（よ）りわけながらピシリと言った。

「人数の少ない分、地の利でゲリラ戦やるからね。"外"へも出るよ。酸素残量はいい？」

「ちょっと待って。とりあえずあなたに従うのはいいにしても、ソルテーン粒子の中でどうやって互いの連絡をとるつもり」

「んなもん心（テレ）...、あわわ。バリアが回復しさえすれば、内側では通じるんだけどなっ」

「たかが不可視障壁に、なんでそんな力があるのよ」

「不可視？ ああ、そう云えばそうだっけ。そっちは単なる副作用で、開発中の特殊なフィールドなんだけどね。」

ニッと笑ってまた映話の回路をひらくと二言三言、早口に指示をつけ加えた。

「...それと、もう面倒だから3区から外の空気抜いちゃってよ。で、何かで1区から出なきゃならない子がいたら、必要がなさそうでも必ず全員に気密服（スーツ）、つけさせてね。部外者が介入してるんだから。」

わかったわ。#

サキはスイッチを切らなかった。

「船中の放送（ヴィジ）、開けっ放しておくから、応援が欲しくなったら中央に怒鳴ってやって
。

とにかく自分のパートを固守すること。

侵入者をうまく甥おとさせるようなら"外"へ出て... この反対側、船尾の方へ引っ張ってっ
てくれ。」

あたし達の反応を見るように一拍の間を置いて。

「行くよっ！」

一斉に走り出していた。

長い一本廊下のつきあたりで二手にわかれ、あたし、サキ、ローラーの3人は左側の道へ。

しゅうしゅうと送風管（ダクト）に吸われていく気体の摩擦音を聞きながら彼女はそこの緊急時用ロッカーで手早くスペーススーツを身に着けた。

駆け出しつつヘルメットの通信装置を開いて言う。

多分こっち側が一番やばいんだ。敵さんの主力が来るとしたら多分ここだと思う。

すでに気圧は0（ゼロ）になりかけ、呼応して照明も非常電源レベルまで落とされた通路に、がつついた海賊どもが見つけたらさぞ喜ぶだろう金髪の知的グラマー美人"エリー"（あたしと似たような名前だ）の立体像が50mおきくらいでぼうっと浮かびあがっている。

不意に、体が軽くなるように感じたかと思うと人工重力までが切れてしまった。

小さい子たちの避難が終わったな。

サキが呟く。

Gはあった方が銃撃戦には都合がいいんじゃないじゃありませんか？

慌てて姿勢制御を働かせながらローラーが尋くと、

悪いね。備蓄エネルギーがそこまでは回らないんだ。普通の船とはシステムが異なるから。

.....どういう船よ。たしか、機関本体は無事だって、さっきの金髪美人は言ってたはずじゃなかった？

しっ！

いきなり手であたし達を制するとサキは壁際に身を寄せた。

「何？」

ガツン、ガツン、...彼女にならって床にはりつけた手の平から鈍い震動が伝わってくる。

船を一周しているらしい長い、右へ向かって湾曲しつづける廊下の少し先に左側へと一本分岐した箇所があって、どうやらそちらの方角からなのだろう。

やがて何かをずるずる引きはがしているような短い感触が来て、止まった。

...ザ、ザザ...

通信機にかすかな雑音が混ざる。

...れで...を、ふさいじまえば、中では話が通じ...ぜ...

海賊たちだ。

船体内部へと取りついてしまったみたいね。

サキがすうっと前へ進み、曲がり角の手前で非常用ロッカーの中のなにかのレバーを押す。

手にしたのはバスケットボールほどもある大きな"バルーン" ...瞬間凝固式充填剤...だった。

ぶわぶわ続けて吐き出されてくるのはあかし達にまかせて横の通廊をのぞきこみ、ぱっと投げつけておいて、また身を隠す。

...やだ。なんてエ作戦よっ?...

声を出さずに笑いころげるのって、お腹の皮がよじれるんだから。

素人はコワイわ～～

顔だけでひーひーへらへら、悪ノリしながら"バルーン"の残りをサキにパスし、最期の1個はもちのろん、しっかり自分で投げた。

うぎゃっ! なんだこりゃ?!

わっ

う、動けん！ ひえ～～～

廊下の端では作業に気をとられていたらしい海賊どもが数人ずつ、蛍光どピンクのとりもちに埋まっていた。宙に浮いていた。

なにしろ船殻が破損した際に一刻も速く気体の流出を止めよう、てのが目的のしろものでもん。

何かに勢いよく接触した瞬間、めいっぱい広がって……

固まり。

ばかやろ～、これレーザー銃じゃ切れねえんじゃんかよッ

誰か作業用丸ノコ持って来いっ！

事態は彼らにしてみれば悲惨だった。

一（ひの）二（ふの）四（よの）八（やあ）…

サキが数える。

14人… と。やったね。こりゃ主力は図書室の方へ取りついたかな？

~~か～いそ～に。~~ #

シャッターを降ろしレバーをあやつり、手動操作で分岐通廊のユニットごと、あっさりと船外投棄してしまった。

気が向いたらあとで回収（ひろい）に入ってあげるからね～。

それまで酸素がもつといいねェ♪ #

ばっきやろ～～～！！

あわれ、最後の声を残してユニットは海賊ごと漂い出て去（い）った。

その後を追うようにあたし達も外へ出る。

広がる空間にかすかにきらめくソルテーン粒子の流れが迷いこんできて、

...サーーーーーーーーーーーー.....

通信機は本当に使えなくなった。

あたしが無駄になるエネルギーのスイッチを切ろうとすると、くい、と指で呼んでサキのヘルメットが接触して来た。

レイがバリアを修理（なお）しちまえば電波状況もよくなる筈なんだ。回路は開けっ放しにしといて。

オーケー。

多少ならず疑問な点もあるのだけど、指揮権は任せたんだもんね。

従うわよ？

素速くささやきかわして離れる。あたしは非常に、とっても、はなはだ不本意ながら、同じことをrollerに伝達するべく顔を寄せた。

.....う～～～っ。

こんな奴と、至近距離で、お見合いしたくないのよあたしは絶対にっ！

言うだけ言って体をひねりかけると太い腕があたしのウェストに廻って引き戻し、

了解。わかりましたよ

わざわざそう一言、応えてよこして黒緑色の眼の片方をつむった。

...え~~~~いウィンクする男だなんて、気色の悪いっっ！

メット正面に肘鉄を喰らわせておいて先行したサキを追う。

ばっ!!

...火線が走った。

.....お~~~~いちょっと待ってよ。

こら！ 遮蔽物の無い人間を狙い撃ちするなとゆーのにつ！

あたしは姿勢制御を滅茶苦茶に動かして逃げた。

サキやローもやはり器用にくるくる回りこんでよけている。

視覚的にも霞がかかったも同然なソルテーンのなか、そうそう正確に狙いが定まるもんでは...

...

判っていたって気持ちのいいもんじゃないわよお！

ひええ★

前方数10m、彼らはこじ開けきれない一見やわらかそうな船殻を放棄して、こちらに注意を向けたばかりだった。

ローが出て来た戸口へ戻ろうと移動を始める。

確かに現状はあまりにも不利ですもん、常識的に考えて、ま、あたしもそうるしかないかと。

ところがサキはついて来ようとしぬ。

やっぱり子供（しろと）、常套手段（セオリー）ってもんが解ってな.....

慌てて引き返して呼ぼうとした時だ。

腰のベルトの何かを操作した、と見る間にサキの気密服が虹色がかった銀光色に輝きはじめ、

光の輪は、広がり。

少女の体をすっぽりと覆った。

次の瞬間、その球体は目に見えなくなった。

なにもなくなってしまったのだ。

（きゃあっ！）

伸ばしかけていた腕をなにかにいきなり引かれて、あたしは危うく悲鳴をあげるころだった

。

「 サキ！」

やっほ。悪いね驚かせて。

あ、あら？

通信機が使える。

サキは笑った。

...狭い空間だった。

銀光色の、球体の、内側にあたし達はいるらしい。

微かな輝やきのなかに閉じこめられて外は一切見えない。

「 ここは...？」

ソルテーン吸収壁のなか。個人用のエネルギー即時変換装置なんだよね。

...ん、なもん。いくらリスタルラーナの進んだ科学力でだって、開発されたなんて話、聞いてないわよ。

ヒマだったもんでわたしらで発明（つくった）んだ。

リスタルラーナには必要な技術知識は全部そろってるくせして、どうも、それを組み合わせて別のものを創ろうっていうアイデアに欠けるからね。

発想の飛躍力がないんだと思わない？

長すぎる有史時代で思考が停滞しちゃってて。 #

「...その言い様だとまるで自分はリスタルラーナ人種（リスタルラーノ）じゃないみたいじゃない。」

あ、やだなっ

あたしの皮肉にボーイッシュな美少女は軽くすねて見せながら苦笑した。

また間違われた。わたし地球人だよお、ほら。

外見上もっとも簡単な識別方法。サキはヘルメットの中で首を振って右の耳を出して見せた。

小さなピアスのはまった、桜貝色の...

...確かに、リスタルラーノならもっと大きく、半円形に近く横に張りだしているはず。

だけれど、ちらっと見えた、前髪の下左の瞳だけが、.....

銀色!?

「...嘘おっしやい。地球人にしちゃ毛色が変わり過ぎてるわよ。

それとも密出入国者として逮捕して欲しいわけでもあるの？」

残念でした。わたしは正規の交換留学生です。元はね。

「ンなばかな、」

ほんとだよ。早々にドロップアウトしちゃって、今はこんな所に居るけどさ

.....冗談。

政府の交換留学生と言えれば自国人にさえ入学のきわめて難しい、リスタルラーナでも最高水準の教育機関への編入じゃあないの。

数年前に始められて、確か、年に100人とはいなかったはず。

20億の学生のなかの、100人よ？

天才（エリート）中の化け物（エリート）、と言える。

「 も少し信憑性のある誤魔化しかた、してよね。 」

h どいな一頭から信じてない。

「 あたりまえでしょっ！ 」

あたしは白けきって断言した。

なんたってあたしも冗談で願書を出して、最初の書類審査でまず落とされたという、暗い過去があるもんね。

" 憧れのリスタルラーナ "には、コンプレックス持ってるのよっ

.....まあいいけど。.....ところで。

ニヤニヤ笑いながらきっぱりと表情を切り換えてサキは言った。

敵さんの散開線の先端まであと5mってところまで今、来てるんだよね。

わたしらの姿が急に消えたもんで、大分うろたえてるようだけど、やっぱり一旦内部に喰いこんでから反撃に出たほうが利口だと思う？ #

「 見えるの?! この状態で、どうやって... 」

あたしに判るのは球体の微光を発する内壁だけだ。

え、そりゃ、盲目宙域（ここ）に住みついているからには何らかの対策は講じてありますよお。

そう言って慌てたように彼女はバイザーをおろしたけれど、どう見てもそれはありふれた遮光眼鏡としか、思えなかったわね？

「 ロルーは、どうしたかしら。 」

あの人はたぶん船内を廻って背後から衝く気じゃないかな

「なんで解るのよ」

特務部隊員の行動パターンなら大体察しはつくよ。

バリアー、切るけど、用意はいい？ #

カチリ。

こうして無茶苦茶な混戦は始まった。

そりゃあね。

何もなかったはずの空間からいきなり現われて相手方のスキをつけたのは良かった。

一度内部に喰いこんでしまった後の銃撃戦は圧倒的な人数差というやつが、かえって有利に働かないこともない。

...だけどね————！！

それにしたって40対2、なのだ。

40人、v.s. (バーサス) たったの2人！

どうやって、勝って言うのよっ?????

とにかく撃って撃って撃ちまくった。

けど、背後から狙われてたらどうしよう、足下には確かな大地があるっていう2次元的戦闘とは違って、味方と背中合わせにしてたくらいではどのみち攻撃は防げないのだ。

自然、分散して自分の身は自分で守るしかないって状態になる。

ぐるぐると廻り込んでばかりで背中 of 制御装置はもう悲鳴をあげんばかりだった。

あらぬ方からの援護射撃が唐突にはじまってローラーがどこかに有利な足場を確保したらしいのがわかる。

だけど彼のってレーザー銃 (ガン) じゃない。

ソルテーンに拡散されたって、ほとんど牽制以上の役には立ちそうもない。

と、…………。

奈辺からだろう、ひどく熱いものが、脇腹をかすめていくのを感じた。

(! やられたっ)

熱線銃（ヒートガン）。

地球警察官制式の持つ衝撃銃とは違うのだ。

触れれば、気絶や骨折では済まない。

何千度という高熱がスーツの被覆膜を溶かし、ペロリと大穴を開け...

(死。)

真空死。

いやだ。

殺さないで！

...一瞬の恐怖からパニックに陥ったあたしに、すうっと、抜けていく生命の音が遠く聞こえる。

すぐんでしまってもはや動ける状態にはなく。

貧血にも見た最初の減圧ショックがやってくる。

.....死ぬんだ。

真っ暗な、諦念。

((アリーさんっ！))

聞こえるはずもないサキの声が脳奥ではじけた。

え??

わずか5 cmのスーツの穴からの噴流に、どれだけの反動力があるものだろうか。

回転を加えさせずあたしはまっしぐらに船壁へと投げ飛ばされていた。

それに空気が.....

流失が、止まった?!

ひったくるようにしてロルーにたぐり寄せられ、損傷に充填剤が叩きこまれた。

補助パイプをあたしのエアタンクに接続、しようとして、規格の合わないことに気づく。

あたしのは地球連邦警察の制式2装でしょ。

ロルーのは、純リスタルラーナ製だった。

ともあれ.....

(とりあえず、救かった。)

まだ完全に四肢は硬直し、冷や汗の絞り出された蒼白の顔のまま、ぼんやりと、それだけが解った。

...そうとなればあたし回復は速いのよ。

同じくらいひきつりきった表情のロルーがぐいぐいと手近のエアロックにひきづって行こうとするのに抵抗し、

(サキが。)

戦闘空間を指さし、自分はひとりで戻れるってことを示そうとした。

ローラーは怖い顔をして首を振る。

そんな、でも、女の子ひとりを戦場にとり残すわけにはいかないでしょうがっ。

たとえその少女が見守るうちにも2人を斃すほどに、強く、腕が立つにしても。

「……………危ない！」

叫びはむなしくヘルメットに反響した。

ひとりが巧妙にサキの死角をとらえている。

勝ち誇ったようにゆるゆると構えた銃の腕をのばす。

サキは近くにいる奴らに気をとられて注意を向ける余裕がない。

突嗟に痺れた手で撃っても、この距離ではあたしの衝撃銃は何の役にも立たなかった。

「はなしてよ、ばかっ！」

ひとりで喚いてローラーの肘を蹴る。

海賊のトリガーにかかった指にぐいと力がこもるのが、おかしいほどにくっきり目に焼きついて見えた。

「…サキ！ きゃああっ！！」

どのみちここからでは何もできはしない。

その時、見覚えのある銀光色…微妙に虹色のかかった…が、さっきの数倍の輝度であたりを照らしだす。

…光の神（アフラ・マズダ）。

地球の真昼のような明るさ。

一瞬、誰もがひるんだ。

銀光は船のそちこちに羽を休めたホタルか、それとも無数の半球形をしたオーロラの群れのようだった。

船殻に厚く付着した粒子層に激しく反応して鮮やかな光彩を放ちながら、輝やくシャボン玉は見るみる間に広がり、互いに融けあい、すきまなく覆いつくす。

見事に幻想的なイルミネーションだった。

光暈はあたし達をさえ包みこみ、追いこして、巨大な基地全体を繭のようにとりこめ...

船殻から100mほども向うにまで展開して、フィールドは穏やかな銀紫の炎舞となる。

その間、40秒ほども経っていたのだろうか。

あとに残されたのは澄みきった... ソルテーン粒子流の細やかなきらめきのない... まっさらの真空空間だ。

...バリアー... エネルギー転換。

通信。

サキの言っていたことを思いだす。

あたしは叫び、同時にロルーの腕からレイガンをひったくっていた。

サキ、後ろっ！

案の定、彼女ははじけたように振り向きざま身をよじり、その頬すれすれを熱線銃の鈍い輝線が通過し。

レーザー光は真っ直ぐに収束したまま海賊の銃を一瞬にはねとばした。

へえ。あんたわりかしい腕してんじゃないか

通信機に割りこんで来たのは青っ毛の生意気なレイだった。

サンクス。救かったよアリーさん。

レイ、バリアの出力あげすぎなんじゃないか？ #

再び忙しくドッグファイトをはじめながら、悠長にサキは言う。

悪い。ケイが新手の増幅法おもいついたのさ。それで遅れた。

ひょいと気軽に相棒も混戦に飛び込んで行ってしまった。

ちょ、ちょっと！ ロルー！ あの無鉄砲なガキども何とかしてよっ！

あたしなら大丈夫……っ」

…うっ。

絶叫しちゃうと視界がブラック。

息苦しい。

酸素残量0で何を言ってるんですか。あなた気力だけで喋っているんでしょーがっ

「だって素人ふたりに戦わせておくわけには」

プロですよ。あの娘たちは。同類項は見れば判る。

「どういうこと」

そんなことより、早く！

まだ往生際悪くもがいている後ろでエアロックは閉まり。

だらしなくも…

……あたしは、意識を失った。

— 続く。 —

" エスパッション "シリーズ vol.0

ブラインド・ポイント

—後編—

(1984年12月1日?)

(1)

...う〜〜、うええ。

気分わる—————...

ぼんやりと正気づくとロルーが至近距離でのぞきこんでいた。

ちょっとオ。

背景（バック）は見慣れない広い部屋。

あたし.....

どうしたんだっけ？

「やれやれ。ちょうど居合わせて良かったよ。怪我人（かんじゃ）の安売り日かね？今日は」

「すみません、ドク。お手数をおかけしまして」

それじゃ。と声をかけて誰かが去っていく。

.....ああ。

たしか、撃たれて宇宙服が。

そのあと船殻を包むバリアの輝きがやたらまぶしくて、それから、

...そうだ。

サキたちは、無事かしら！？

「...う、...」

まだ言葉は口のなかで声にはならず。

「アリー？ 大丈夫ですか？」

「ぐう～。……」

腕時計（クロノメーター）に目をやると4分以上は空気（エア）無しだって事になるもんねえ。

吐き気がする、くらいで済んだのは、はっきり言って幸運（ラッキー）だったけど。

（自覚ないだけで案外、脳味噌ばかりになってたりして。）

体のコンディションを確かめる。

ん、OK。

骨折なし。挫傷なし。とりあえず、生きてる。

「アリー」

心配そうな…

とても、なんていうのか、気遣わしくてならないとでもいう風な、ロルーの蒼い顔の黒い眼と、ふたたび瞼をあけるとモロにかちあってしまった。

「……じょぶ。」

手をぱたぱたと不って唇のはしを無理につりあげて見せる。

あ～ダメだこりゃ。やっぱ頭、やられちゃった……みたいな。

このロルーの表情（かお）がマジで優しげに思える、だなんて。

「…地球人ときたら本当に…」

ためいきをついて黒い眼で微笑って。

じとり頬にはりついていた前髪をそうっと、長い指がはらいのけてくれた。

「普通なら仮死状態で、集中医療管理（M.C.C.）による蘇生措置が必要なところですよ？ それを強心剤（カンフル）一本で立ち直ってしまうんだから、あなたは。」

すいませんねえ野蛮人で。

「応急処置がよろしかったんですわ。リスタルラーノで口移し（マウス・ツー・マウス）の人工呼吸法を御記憶のかたがいらっしゃるとは思いませんでしたけれど。」

おだやかに声をはさんできたのは、例の、先刻サキと話していた映話機（ヴィジホン）の金髪美女だった。

...ところで？ マウス・ツー・マウス.....？

...げっ！？

「...わ。そんな顔しないで下さいよ。しかたないでしょー、あの場合。」

う〜〜〜ぐるるるる...っ

「まあ役得ではありましたが。」

！ このっ！

すこおし、優しいかな、なんて、見なおしててやればっ

こいつ、もういつものぬらりひょんなんじゃあないのッ！！

...

（参照したければ資料）

<http://85358.diarynote.jp/201708252059136132/>

(2)

ここはこの基地のおそらく第一区画（エリア）、中央集会室。

船の規模からすればずいぶん小さめのサイズなんじゃないかしら。

ちょうど小学校（エレメンタリー）のプレイルームといった部屋に、隣の食堂室らしいのをぶち抜きにして、今は人間でごたごたしている。

その大部分が、子供。

赤ン坊から13～4歳くらいがせいぜいの、賑やかこの上ない集団。

ごくわずかな保母（ナース）と、研究屋ふうの白衣の大人たち。

海賊の危険のまっただなかだというのに、そこは清潔で、おだやかで、安全で...

護られている、という信頼感が、どこかにあった。

「...それじゃ、」

と、へらへら笑いながら立ち上がってローラーがむこうを向く。

「彼女を頼みます。私はそろそろ戦列に戻りますので。」

「あら。」

あたしが、なんですって、この"走りっぱなし"アリーさんを後方送りにしとこうって言うのっ！

...と喚きたてるだけの元気を取り戻すひまもなく。

金髪美人がのたまった。

「まあそんな事おっしゃらずに御一緒にいらっしゃればよろしいのに」

「は？」

上品（ハイ・クオリティ）にも無邪気なお誘いに、さしものロールでさえ途惑った声、だしたわよ。

「いまお茶の仕度をしていますのよ。地球風の手沸かしのものですから、リスタルラーナのかたにはお口に合わないかも知れませんが、」

.....きゃん♪ 地球風のお茶っ！？ ♪♪♪♪

...などと、思わず喜んでる場合じゃあ、ないっ！

「...ちょっと、はなたっ！」

とび起きて喰ってかかる。と、やっぱまだ、声が潤れてる。わよねえ。

「アリー！？ 気分が悪いんじゃ、」

「はん。なめないでよね。地球人の回復力。」

実際あたまはメチャ痛いわけ。じろりと不機嫌にロールにはイチベツをくれて。

ひと息にまくしたてた。

「...あなた、」

「 エリザヴェッタと申しますわ。」

「ミズ・エリザヴェッタ。言わせて貰いますけど、現在の状況が把握できてらっしゃるのかしら。

ここは他に助けをたのめない盲目宙域のド真ン中で、この基地は噴射管（ノズル）をやられて現在航行不能のはずです。

ベースジャックをもくろんでいる海賊の数はだいぶ減らしたとはいえまだ約40名。

対する我々は戦闘要員わずか9名。

うち2人はあなた方のお仲間の、まだ少女（こども）ですわね。

それが、一番の激戦場で白兵戦やってるんですよっ！！」

ぜえぜえはあはあ。

助けに行かなくても心配じゃないんですかっ！

叫びたかった。

もはや連邦警察（テラズポリス）警部としての義務以上にあたしはこの正体不明（わけのわからない）船に興味をひかれているもの。

サキ...

無事かしら。

つい今だって撃たれかけていた、灰色の髪の不思議な少女（こ）。

.....にっこりと、金髪美人は笑った。

「大丈夫。レイが行きましたでしょう？」

あの二人がそろえば、たいていの修羅場は、切りぬけて帰って来ますわ。」

.....うっとオ。...全幅の信頼。

一瞬、年下のはずのその美女の、あまりにも母親然とした笑顔...誇らかで、愛情に満ちて...に気圧されそうな気もしたけれど。

「...冗談じゃないわ！ そこらの喧嘩とは危険の度合いが違うのよっ！」

サイドテーブル、ひとつぶん殴って、まだすこしふらつく足で寝椅子から立ち上がった。

「...アリー。...あ”~~~~」

「そんな顔してもあたしも行きますからねロルー。」

「ディーム達の位置は判って？」

「非常部隊（レインジャー）の皆さんなら、今、それぞれの部署をはなれて船尾方向へ移動中
です。」

答えてくれたのは壁際の操作卓（コンソール）で美人に代わって映話のモニターをしている、
愛らしい茶色の瞳の少女だった。

「サキから言われたので、あたしがそう指示を出しました。」

「そう、ありがとう。ロルー、行くわよ！」

「やれやれ...」

「早目に戻っていらして下さいね。お茶うけに洋なしのタルトを焼きましたのよ。」

...ずるっ....

ヘルメットひつつかんで駆けだすうしろで、金髪美人はおっとりと、湯気のたつお茶を淹れて
いた。

...

（参照したければ資料）

<http://85358.diarynote.jp/201708252122583719/>

...あ〜んもう。

鼻のおく、香りが残っちゃって、はなれない。

あれは絶対クインマリー。

あたしのいちばん好きな。

...どっと、ホームシックよ。いきなり。

こんな事件はやく片づけて、さっさと帰りたいわよあたしはっ！！

...腹だちまぎれに、跳び込んできた海賊のぼんのくぼ、がしっと一発ヒジ打ちを喰らわせて。

「敵前逃亡とは情けのない。」

邪魔にならないよう廊下のすみに蹴倒しておく。

ヴィジホンの少女に教えられて、ただいま現在の乱闘場所へと、一歩足を踏み出すと。

.....なるほど.....

すでにあの2人の腕前には敬意を表するっかないわけよ。

プロですよと、ロルーが言うのも肯ける。

海賊、もう24〜5人と残っていやしないんだもの。

意外そうな声はもちろんサキだった。

舞台は銀色の船殻と紫炎ゆらめくエネルギー・フィールドとの狭間（はざま）の真空空間...

てのは先刻と同じなのだけれど。

ただ、大分、船尾方向へと流されてきている。

流されて...

と。違うな。

それを意図して流しているんだわ。サキとレイの2人が。

ディーム班長以下レインジャーの連中があちこちから援護に入ってくる。

包囲し込めて行く先には、あれ何かしら。カ場（フィールド）が基地の壁にむけて急激にくびれこんでいる場所があって、

その少し手前に多少色合いの異なる薄膜が...

いえ、目の細かい光の網といった方が正確でしょうね。

びっしりと、張り巡らされていた。

その網に、何故か事故（クラッシュ）のときの船の破片とか流された子供たちの縫いぐるみだとかがひっかかっているの。

ふわふわと漂って行ってまた、気絶した海賊がなんなくからめとられ。

...あはん。

なんか雰囲気、魚獲りね。

あそこへ追い込もうって言うの...

銃をあげ、あたしも戦列に加わった。

ゆっくりしてくれりゃいいのに。エリー居たでしょう。

.....あのねえ。

でき得れば、銃撃戦の最中に平然と私語したりなんか、しないで欲しいんだけどっ

子供（ガキ）ふたり危ない目にあってるってエのに、お茶ゆっくり喫（の）んでいられるほど無責任じゃないわよあたしはっ

そんな性格なら今ごろ警官なぞやっとなん。

危ない目。...う～、彼女にそんなこと云って出てきたのォ？

「あら完璧に信頼してたわよ。」

嘘うそ。そりゃ、部外者が介入してるってんで見栄はったんだ。エリザヴェッタの心配性ときたら既に病気の域。

「おやま、心配病？ うちの妹と一緒にね。」

妹さん、居るの。いま地球？

「あのこは火星でお料理の学校に...」

.....いいけどね。世間話（これ）って命がけで撃ったよけた、してる時に、するものだったっけ...???

あたァ！

サキが、頭かかえたい、という声で唐突に叫んだ。

う～～～っ 計算外。

何事よ。奴らの人数が急に視界から減ったじゃない.....

と。

それはない。

それはひどいわっ！

サキ。あの隙間...？

噴射管（ノズル）の軸が歪んだって、そういえばエリーが言ってたんだった...

ど。じ。

レイの冷やかな感想は簡潔だった。

つまり、その歪みに沿ってリスタルラーナ製の柔構造船にはかなりの幅、亀裂がはいり。

それを見つけて海賊ども...基地内部に逆戻りして逃げこんでってるのよっ！

五月蠅いな——っ！ その計画にホイホイ乗ってたのは誰だ?!

まさかあんたが見落としてるとは知らなかった。

「...喧嘩してる間に、後を追ったらいかが...？」

そうして。

エアロックをかいくぐり。

撃っちゃ走り、撃っちゃ走り。

して。

船の廊下で盛大な鬼ごっこが...

語義通りの"泥警"なんだけど...

始まって、しまった...。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201708252149158979/>

(4)

この調子じゃ追いつけねえな。...中央区画に近づき過ぎだ。

逆回りするぜ、サキ。 #

さんくす、レイ。...しかし、それにしても。

くくくっ。と、サキは面白くて仕様がないうって調子で笑った。

運のない奴らだ。居室区画に迷いこまされるなんて、ね。

え〜と、ディーム班長（さん）？ #

#おうよ#

次の角でレスス隊員（さん）つれて左曲がって。

ローラーさんサイト隊員（さん）正面の階段。それから... #

.....驚いた。

「ハイっ！　そこで左折して貰おうかい兄さんがた！」

楽しげにさえ響いた声は前方かなりの距離を先行していた海賊たちの、更に向う側だ。

一体どうやれば逆回りして直線距離100mの10秒フラットが出せるわけ？！

見るもあきれれるほど気障に斜（はず）に構えたレイ、視認もろくに出来ないぐらい素速く、片手だけで数射して...

故郷の草原でとびきりの牧羊犬（コリー）が羊の群れを追う、その動きさながら。

見事に海賊たちの針路を封じて、バラバラに脇道へとそらさせてしまった。

アリーさんそこ2本目の昇り！

「了解」

言われてやたらと細い坂道に飛び込む……

…え～～い、もう！

なんで、なんだって、宇宙船のなかに不規則にうねりくねってる上り坂の小径、なんてものがあるのよっ？

唐突に段差はあるし前方の見えないS字カーブはあるし所によっては体、横にしないと通れないほど無茶苦茶道幅が狭くなってしまおうし。

おまけに…

どうして、坂をのぼって階段おりて、素直に角を曲がったら、

垂直方向にぶら下がって駆けて来る、海賊とはち合わせ、しなくっちゃならないのよっっっ！

シュールだ

ローラーの呆れ声が通信機にはいつて来る。

「 どーいう！ 」

あたし、海賊撃ち倒しながら叫ぶ。

「 感覚で人工重力配置してンのよこの船っ！！ 」

設計者の性格が疑わ……っ 」

どうもすみませんねエ。次の角、右に曲がって、梯子を降りて。

ちっともすまなくなんか思っないサキの声だった。

リノル隊員（さん）、次、左。

だってこの子供たちって年に1～2度と外に出られないって子が多いんだもの。

こうでもしとかなないと、地上に降りた時にまるで方向感覚ってものが存在してない人間が出来上がっちゃう。 #

そりゃ建前だろーが。実は根本的に迷路遊びってエ奴があんた（サキ）は大好きだったと。
#

あはは。真実をつくなよレイ。あ、ローラーさん、そろそろ次のカーブが見えない？

.....透明チェスだ。

本当の名人は、もはや勝負する時に現実のチェス盤を必要としないっていう、あれ。

あきれちゃうわね。

いくら地の利のある住人、それとも設計者？だからって、これだけ複雑怪奇骨折的に錯綜している通廊群を、それも各人の移動速度までも計算に入れて、自分も戦っているながら即時（リアルタイム）に、指示を出し続けていられる脳味噌。

...コンピューター並だわ...

多分にズル、してるんだけどね。

脈絡のない彼女（サキ）のセリフが誰にともなく入信（はい）った。

うわっ！

ぎゃっ！

たて続けにふたつ、悲鳴があがる。

リノル隊員（さん）スレッド隊員（さん）負傷っ。

サイト隊員（さん）、応急処置たのむ。そこ右に入った所。

ディーム班長、その辺に映話あるでしょう。ケイに誰か寄こすように連絡して。

場所は通路0337-49。

レイ！ #

こっち半分、掃討した。あとは。

#OK！#

パシっ。

鋭い音がして、振り仰ぐと、頭上で天上からぶら下がっている...としかあたしの側（サイド）からは思えない...サキが、海賊ひとり、気絶させたところだった。

「アリーさん、そこからこっちに合流して。」

暑っ苦しそうにメットを脱ぎ捨てながら手を振って見上げて言う。

床を蹴って、一回転して、天上に跳び降りたあたしを、もういい加減あきれ飽きた、という顔でやって来たロルー達が眺めていた...

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201708252216532497/>

さてそこから追いかけて追いつめて。

執着地点の大きな天球室（プラネタリウム）へてんでに飛びこんだ頃にはあかし達、四人だけになっていた。

海賊どもの数もぐんと減って、もう十人とはいない。

ただし最後まで生き残った連中というのは、おそらく首領と側近で、当然それだけウデもたち
...

「ああも、ちょろちょろうっとオしい！」

喚くなり、楯にしていた座席の列からレイが飛び出してしまったのは止める暇もないことだった。

パパパー—————ッ!!

あっというまに火線が集中するのを信じられない程の跳躍力で横つとびにころげこみながら、かわしきる。

数度のジャンプで壁の非常口に飛びこんだ彼女のあとには、黒々と、炎をあげてくすぶっている椅子の残骸の列がのこった。

「...う～～～。造ったばかりだっていうのにつ」

サキがうなる。

「ほらよ！ 全員、銃を捨てな！」

本当にどこをどう通り抜けるのか。

天球室の向う側へ不意に現われた青い髪の姿は、仁王立ちになった隙だらけのポーズで足元に向けて銃を構え...

その下には。

海賊どもの首領と覚しい男が、腹這ってこちらめがけて撃っていたそのままの無防備な姿勢で、恐怖にひきつっているのだった。

「...レイ！ 殺すなよ！」

油断なく銃は構えながらも素速く立ち上がってサキが叫ぶ。

「殺すんじゃないぞ！」

「いやだね。」

大股に近づいて行く相棒（サキ）を見降ろしてレイは冷ややかに眉を上げた。

「例え知らずにであろうとあたしらのエスパッション号に体当たりをかました上、ドンパチ沙汰まで引き起こしてくれたんだ。ミノとグラオンは重傷だ。

こいつらのせいで怪我を負った子供（チビ）どものなかには、あんたお気に入りのリアラもいたと思ったけどね！」

「レイ！」

「首領にくらい、責任をとって貰おうじゃないか」

そう...

散開している敵方のうち一番の高处にその男は位置していたのだった。時折り何かしらの指示を叫びながら。

だからこそ、レイは男を撃ち殺したあとで残った海賊たちをやすやすと根こそぎにしてしまえる筈なのだ。だからこそ、彼女たちは男を首領だと思いこんだのだろうけど。

首領が息をしている間は自分が撃たれることはないだろうと、下から見上げる手下どもに全身を無防備にさらしてレイは立っている。止めようと立っているサキも同じだ。ふたりとも、海賊たちの微妙な感情の動きには気づかない。

ああ、もう！

いくら急場のこととは云え、一緒に戦うなら、相手の情報くらい与えておくんだった...

なんて、後悔しているヒマもない。

あたしはROLLERに囁いて、椅子の列のなかを移動しはじめた。

身内だけでは海賊もたいそう情が厚いというのがこの場合は救いになった。

首領と間違われて殺されようとしている仲間を、皆が見捨てる決心をつけるまでの、貴重な数秒...

間違えられた男は下を見、あきらめの表情で微笑って肩をすくめた。

「.....《幽霊男》（ゴーン・ラ）！」

これが最後とばかりに海賊たちのなかに覚悟を決めたような高い声で呼ぶ者がいたのだ。

あたしは男の視線を追ってそいつを見つけだした。

黒髪の大柄な女。

そう。こいつだわ。

あたしは初め、サキが彼女なのかと思いこんでいた。

幻の、この一味の、真の首領の...

じり、と椅子の影を縫って這い寄る。

じり、と海賊たちの銃がふたりの少女を狙って持ち上がる。

「...言っとくけどリスタルラーナも地球も法治国家なんだぞ」

サキはまだ本気で相手を睨みつけていた。

.....う～ったくっ 気がついてよ、ばかっ！

あんたたちの取ってる人質は無効になったんだってばっ

「このシスターナ・レイズさんのいる所は、どこであろうと治外法権さ」

おっそろしく、気取って、薄い唇がまくれあがっていた。

ぐいと、引き金を絞る指に力が入る。

「殺すなって、言ってるだろう!!」

いろんな事がいっぺんに起こった。

まず、レイ。

撃つと見せかけるや呆れるほどの脚力で男を眼下の床めがけて蹴り落とし。

一旦は見捨てたはずの仲間を助けようとして突嗟に体勢を崩した海賊たち全てにむけて、最大出力にした光線銃（レイガン）を向け。

サキはそのレイを止めようと...驚くまいことか...

助走もとらずに一挙に3 mかける1 Gの高さを飛び上がり...、壇に足をかけるなり、レイに体当たりをかまし。

ローラーはこれも最大出力にした衝撃銃（ショックガン）で、総立ちになった海賊たちを文字通り片あしから薙ぎ払っていった。

そしてあたし。

するり、と女海賊の背後にはりついて。

思いっきり怒鳴る。

「 さあ！ 今度は素直にホールドアップ、してよね！！ 」

...一般に、地球系の宇宙海賊が首領にささげる忠誠というのは、絶対的なものである...

ひとしきり武器を投げ捨てる音が続いたあと、天球室のなかは、

しーんと静かになった...

「だからね、あなた達が人質にとったのは、しょせん副将格というか、外交担当って程度の奴でしかなかったのよ。」

首領たち一行をお縄にして船倉に放り込み、それから来た道をとって返してあちこちで気絶し（のび）たままでいる手下どもを回収しながら、あたし。

「警察関係とか、一部では割とよく知られた話なんだけれど、海賊船《幽霊》（ディリンゴーン）号には表に出て来る"幽霊男"（ゴーン・ラ）の他に、謎の首領がいるっていう...」

「.....ディリンゴーン.....!？」

サキが首をかしげ、レイが叫んだ。

「...スランナート..."ゴクリの指輪"（スメアゴルズ・リング）...っ!!」

ぎ、くっ

「...あなた達...」

顔を見合わせている二人を、あたしは、太鼓に驚かされた猫の気分で睨んだ。

近く公判の始められる《スランナート事件》というのは知っていると思う。

そう。あの、半年ばかり前にやっと決着のついた、近来まれに見る大がかりな麻薬犯罪だ。

四つの太陽と十一の惑星系をまきこんで、被害者総数は延べ七億人にもものぼった等といわれる悲惨なやつで、その元凶となったものが暗号名（コードネーム）"ゴクリの指輪"と呼ばれる、名の通り金の装身具の型をした、強烈な催幻装置なのだけれど。

事件の一応の到着後、上司から極秘裡に《スランナート》公判のための一番重要な証拠物件が実は未だ押さえられていないんだ...と聞かされた時にはホント、ショックをうけたわよ。

一番重要な証拠、つまりは"ゴクリの指輪"（スメアゴルズ・リング）の製造法やなんかが、大捕物の寸前に仲間割れを起こした《幽霊》（ディリンゴーン）一味に、うまうまと持ち逃げされていたのだ。

はやいところ海賊（しょうにん）どもを引きずって帰らないことには、折角とらえた麻薬犯どもを無罪放免なんてことにさえてしまいかねない。

あまつさえ、"ゴクリの指輪"の製造法がどこか別の組織の手にでも渡ろうものなら、第二、第三のスランナート禍が...

「なるほどね。それで判ったよ。地球警察（おたく）が慣例けとばしてまでリスタルラーナ（こんなところ）まで出張って来てたわけ。」

サキが言う。

ずずず、と、背中からレイが壁にへたりこんで、

「.....証人（あいつら）、殺さないでよかった.....」

「あなた達ねっ」

あたしは眉をひきつらせながら、もう一度云った。

「なんで、"ゴクリの指輪"とディリンゴーンに関連性、なんてものを知っているのか聞かせて貰いましょうか。

この件に関しちゃあれだけ徹底的に報道管制を敷いてたんだし、そもそも警察内や情報部でさえ、ごく一部の人間にしか知らされてはいないのよっ」

そうでもしなけりゃ世論と事件の被害者がパニック起こしてしまう。

ダークサイドに情報が洩れた日には、どこの組織もこぞって海賊船を匿いたがるだろうしね。

「そうよ、だいたい、あなた達やこの基地（ふね）は、一体...?!」

「ストップ。」

正体不明の（美）少女ふたりは、しまったなあという藪蛇顔で不敵にニヤニヤと笑いながら、代表して、という感じでサキが右手を上げて人のセリフをさえぎった。

「事情が判ったところで、エスパッション号に正面衝突（たいあたり）した件の責任は不問に付してあげるからさ。

「そちらも、こっちの正体の追求するの、止めにしない？」

「〜〜〜なんですってっ!? 人をこれだけ混乱させておいて、よくもまあ...っ」

「そりゃ単なるおたくの好奇心だろうが」

「こらレイ、あのですね、アリーさん。わたしらとしちゃ海賊一味だけを送り返して、残りの皆さんには生涯ここで暮らして頂くって方法もあるんだけどね。

「わたしらの協力なしにどうやってこの盲目宙域（ブラインド・エアリア）から抜け出すつもり？」

「公務執行妨害だわ！」

「もっかい力づく（ドンパツ沙汰）で基地乗っ取り（ベースジャック）やってみる？」

「別にいいけど、ここってリスタルラーナ領域なんだよね。

「地球警察の逮捕権って特例として海賊に対してだけ認められてるものだと思うよ。」

「...ローラー！ ちょっと！ なんとか言いなさいよ特務部（リスタルラーノ）！」

「はあ。」

「なにが" はあ "よ！」

「...特殊任務部隊っていうのは別に悪人を逮捕してまわる組織ではないんですよええ。

「高度に政治的な配慮で動かされている集団だからして。」

「口笛吹いて逃げるなっつての。え〜〜〜い!!」

「だから何よ!？」

「いま思い出したんですが、《スランナート》の主犯逮捕劇ではどこから現われたとも知れない謎の美少女ふたりが、大きな役割を占めていたという話…」

「 え？ 」

「おーお。あたしらもついに有名人になったか」

……あたしは末端組織撲滅の方のチームにいた。あたしはそんな報告、読んでいない……

「どーして地球連邦警察も知らないような情報をroller（あなた）が持っているのよっっ!？」

「特務部なもので。」

のんしゃらんとして答える。え〜〜〜いッ!!

にっこり微笑ってサキが言った。

「それとも話してあげるから賠償請求額、支払う？」

基地（ふね）の修理費と子供たちの治療費。

…たぶん連邦警察の金庫からは出して貰えないだろうなあ…」

…お金の話なんかしないでよっ ただでさえ妹の結婚準備で大変だっというのに…

「 わかったわよっ! 何も聞かなかったことにして大人しくしていればいいんでしょうっ!？」

あたしがそう喚く頃に、ちょうど海賊の手下回収作業は終わっていた。

そのあと。

サキ達が徹夜で噴射管（ノズル）と機関系統の修理をし、基地...《エスパッション》号とやら...が盲目宙域（ブラインド・エアリア）の辺縁部まで移動するのに約三日。

その間、漂流して去った海賊船を追いかけて肝心の証拠物件と、残されていた負傷者たちを回収したり、まだ使える救命艇を拾ってきて六十人近い海賊の大世帯を最寄りの保安局支部まで運ぶべく改装したり。

なんだかんだで、慌ただしく過ぎて...

「ところでローラー、オディアさん？」

「おっと、つれないなあ。オードって呼んで下さいよ」

「あのねっ。」

やっと一段落ついたティー・ブレイクで、あたしは軽くローラーをにらみつけた。

他の連中はみんな怪我して船室（うしろ）で寝てるでしょ、借りつけた小型船をふたりだけで七十二時間動かさなければというので、操縦系統に若干手を加えて。

これであとは食糧と空気（エア）を分けて貰えばいつでも出発できる、というひと時だった。

「真面目な質問よ。正直に答えて欲しいんですけどね」

「恋人ならいませんか？」

「...ローラー！ あたしは地球連邦警察として...！」

「はいはい。シリアスに承りましょう。」

...疲れる。.....

「あのですねえ。」

あたしは紅い前髪をかきあげながら言った。

要するに、境界無視した一介の刑事のために何故、管轄ちがいの特務部が...それも正体を隠してまで...お目付役にまわされて来たのか、そこが知りたかったのだ。

「...正体、ばれるつもりはなかったんですがねー。...あの連中さえ...」

「ため息ついてみせたって駄目よ。」

いくら国家機密が、黒星だ、とぼやいてみせたってもう遅い。

本当をいえば外交儀礼上、警部ごときの無理に尋き出していい事じゃなさそうだというのは、判ってはいるんだけど...ね。

~~（リスタルラーナの特務部員というのは慣例として、ことごとく外交官特権を持っている...らしい。）~~

「しょうがない。」

しばらくあたしと睨めっこをしていたroller、意外にはやく、ニヤリと照れたように笑って肩をすくめた。

「あなたには話しておきましょうか。この計画、地球連邦では未だ政府総裁とその側近あたりにしか通じてないんですがね。

御存知の通りここ数年、連盟（リスタルラーナ）でも連邦（テラズ）でも異様に急激に犯罪件数およびその未検挙率が上がっています。

犯人が、見つけられないのではなくて居なくなる。

ここから、お互いの犯罪者が高飛びをかけあっているのではという仮説が出てくるわけですが...

逃亡者が単発的に現われるものであれば、まだ問題はないんです。

しかし残念ながら、追いつめられた者がただ闇雲に国境を越える、という現象にしては、その数が多過ぎる。」

...それに例えば、どう考えても地球の技術だけでは製造不可能な、"ゴクリの指輪"（スメアゴルズ・リング）のスランナート事件や、自信満々でリスタルラーナ領宙に逃げこんで行った《幽霊》（ディリンゴーン）の態度。

おそらく相方で連絡をとって犯罪者達を煽っている者がいる。

従来の結社同士の協定か、悪くすれば両世界にまたがる規模の新しい組織群が出現しつつあるのか...

「...そこまでならあたしも考えてたわ。で？」

まさか地球圏での情報が集まりにくいのでそれ以後の捜査が進まない、とか、こっちの責任にする気じゃないでしょうね」

嫌味たっぷりに云ってやった。

連盟保安局と地球星間警察とのぎごちなさの原因は一重（ひとえ）にリスタルラーナ側の非協力性にあるのだ。

逃げ込むと判っている船を迎撃してくれず、我々の追跡はしりぞけ、逮まえても送還してくれない。

...どれだけ口惜しい思いをしてきたか。

「しかし仮に保安局と地球警察が情報交換などの制度をかためたとしても、その行動力には自（おの）ずから限界があるでしょう。

現に国境を無視した犯罪が行なわれているのに、それを追う側が妙な縄張り意識に邪魔されているなんて不合理だ、とは思いませんでしたか？

自由に往き来できる機構があるべきだと。」

「 思ったわよっ！ それ、帰ったら上司に提出するつもりだったんだから！」

「結構。つまり特務部（われわれ）の計画は功を奏したわけだ。」

え？

「合同捜査の効果のほどを宣伝するためにもね、あなたには是非、成功して貰わなければならなかった。

...それが今回の、ぼくの任務だったんですよ。

地球警察内部から動きがおこる、時を同じくして連邦（リスタルラーナ）保安局長から正式な申し入れがある筈です。

両世界共通の権限を持つ、有能な捜査官の集団、てやつが出来ますよ」

「.....ひっ、人を操り人形にして...っ！！！」

「...地球人というのは感情が豊かでエネルギーで」

あたしは怒っているというのに突然ロールときたら、くすくす笑いはじめた。

「実に魅力的だ。

陰にこもって警察（テラズ）の妨害工作をやりながら、突破口を開いてくれる人間をずっと待っていたんです。

あなたは優秀で結局ほとんどぼくの出番が無かったくらいだし、経歴からいってもまず確実に汎宇宙特捜部隊（リゼラセート）入りとなるでしょう。

で、そのシステムの話なんです、これは現行の特務部の体制をひっぱってきて二人一組の最小行動単位をつくることになると思います。

で、ぼくにはいま特定のパートナーっていないんですよ。

...で、つまり...。」

.....ちょ、ちょっとタンマ。

何が言いたいのよっ！？

「ぼくと組みませんか？ できれば一生。」

.....冗談じゃないわよお...ツ☆

紅くなったあり蒼くなったりたっぷり一分間の沈黙のあと。

「...へ～エえ。そおいう事だったのかー...。」

背後からいきなり声が降ってきて、あたし達は二人とも飛び上がった。

「.....サキ！ ...っいつの間に...っ」

「...ぼくも気がつかなかった...」

「どーもお邪魔さま。無粋な真似をしまして。」

ニヤニヤと、すぐ後ろの一段高くなった通路の手すりから頬杖をついて見下ろしている。

「ローラーさん返事はあせんない方がいいよ。彼女、その見事な赤っ毛から推（お）して、はにかみ屋の多いスカディー族（スカディスティアン）だから。」

「そりゃどーも...」 慔然っ。

「だけどそういう話なら、また遠からず会えるみたいだね」

「え？」

「汎宇宙特捜部隊（リゼラセート）で？」

ローラーの眼は面白げに光をはじいた。

「うんそう。わたしは正規の訓練は受けたことがないから少し遅れるだろうと思うけど。」

...いい加減、わたしらの正体は察しがついてるんじゃない？」

「う～ん... この基地（ふね）のオーナーが誰かって事くらいは。」

「あっは。それ以上はまだ判って貰っちゃ困る」

「了解。」

「ちょっと！ 二人だけで解り合わないでよ！」

「おや妬いてくれるんですか？」

「誰が?!」

「痴話ゲンカは他人（ひと）が消えてからにして欲しい」

~~~~~っ！！

「単にこれを頼みに来たんだ。今回の件の請求書。コルディのおじさまに渡してよ。

ついでに、報告も彼に直接やってくれるとありがたいんだけどな」

指にはさんだ紙片がローラーにさし出される。

「コルディって誰？」

「保安局長官.....の、愛称（ファーストネーム）です...」

ってことは.....警視総監.....！？

あたしはまじまじと、少女（サキ）の一見無邪気げな顔を見上げてしまった。

ピーーーッ

細い予告音とともに映話が開く。

# 食糧と酸素（エア）の積み込み、終わりました。 #

# 前方8ラクターで盲目宙域の外縁です。 #

# いつでも発進できましてよ。 #

エリザヴェッタと茶色の瞳の女の子が仲良く並んでいる。

その後ろで行儀わるくころげて本をひろげているのはレイだろう。

「それじゃまた、そのうち。」

あっさりと手を振ってサキは灰色の髪をひるがえす。

# 退避完了。エアロック確認。発進スタンバイどうぞ。 #

「...発進スタンバイ... スタンバイ完了」

電子操作で母艦と小型船とを結ぶ酸素（エア）やエネルギーのチューブ、通称"へその緒"が外れていく。

前方の壁が横に滑って、銀色のもやを透かして見える、星々のきらめく宇宙。

「...さよなら、お世話になったわね」

片目をつぶって微笑んで。

「 ..... GO ! 」

操縦桿を引き倒す。

そしてまあ、一件落着。なんでしょうね....。

— 完 —

(草稿 & 没原稿)

---

(草稿 & 没原稿)

(設定資料)

---

(設定資料)

「1984. 6. 6. ...書きながらプロットを作っているというこの怖さ!!」

---

<http://85358.diarynote.jp/201708112159341274/>

「1984. 6. 6. ...書きながらプロットを作っているというこの怖さ!!」

ブラインド・ポイント ...エスパッション・シリーズ Vol.0

- ・宇宙空間で鬼ごっこをしている。
- ・ブラインド・エアリア。
- ・ローラー刑事。アリー警部。
- ・「アリー好み」は、派手な銃撃戦？
- ・通信器は撃ち合いでおしゃか。
- ・政府指定の実験宙域。無人。
- ・タイム・リミットがある？
- ・海賊一味をおっかけて。
- ・「走りっぱなし」アリーさんの説明。
- ・誰のせいなんだろうね？
- ・「わ、うならないでください。」
- ・胃が痛い~~~~っ
- ・エネルギーのむだ使い。
- ・まずいティレイカ。文化の相異。

- ・ 異文化
- ・ 地球の略史
- ・ エーリアン
- ・ リスタルラーナ文化について。単一民族。
- ・ アリーさんが追っかけてる理由。
- ・ アリーさん少数民族。演劇部。

「その科白のどこらへんに

誠意が含まれているわけ？」

(キャラ設定・他)

---

(キャラ設定・他)

## (登場人物紹介)

---

<http://85358.diarynote.jp/201708172044532411/>

## (登場人物紹介)

### ◎ 登場人物紹介 ◎

アリー (アリニカ・デュル・セザール) 警部。

地球人。♀。

本編の第一人称 (主人公) で、地球系星間連邦 (テラザニア) の連邦警察・広域凶悪犯罪部所属。

通称 "走りっぱなし" アリー。熱血直情、若手きっての敏腕警部。

小柄で赤っ毛・茶目の、(口さえ開かなければ) キュートな美女。

ロルー (ロルー, オディア モルカ?) 刑事。

リスタルラーナ人種。

国境を越えて宇宙海賊を追って来たアリー警部の、お目付役にまわされた、ノンポリことなかれの平刑事。

実は、リスタルラーナ星間国家連盟の保安局特務部隊要員 (はやい話が諜報部員) だった。

ディーム班長、以下、班員7名。

リスタルラーナ保安局のレインジャー部隊員。アリーの指揮下にまわされて、高速宇宙艇を操縦していた。

海賊船を追う途中、その昔あった大事故のなごりでレーダー・通信器等がいっさい利かなくなるという、盲目宙域・ブラインド・エアリアーにて座礁。

その後の戦闘で2名負傷。

### サキ

謎の少女その1。16~7歳で、すらりとした長身。

不思議な灰色の長い髪をポニー・テールに結び、残りの前髪で顔の左半分を覆い隠している。

高速宇宙艇の座礁の原因となった、正体不明の巨大宇宙ベースに乗っていた。

実はこのシリーズの主人公。

### レイ

謎の少女その2。サキの相棒。染めたらしい派手な青色のショートヘアに、カラーコンタクトだろう金色の瞳 (ねこのめ)。

いかにも性格悪面（アウトローづら）した、とても女とは見えないガリガリ体型の長身。  
いたって凶暴。

(アリーさんイラスト by 由羽院)

---

<http://85358.diarynote.jp/201708172044532411/>

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたら句きあり\)](#)

2017年8月17日20:59

イラスト描いてくれたのはツツヒラ君。(由羽院=ゆいば・いん)。

なにせ30年前なんで、現在の住所不明。生死も不明。(^^;)

(嫁ぎ先は確か東京都東部だ...すでに死んでる確率かなり高し。)







リ・ステラリアナ。 （「あんたお気に入りのリアラ」ちゃんの本名とおぼしい）

---

<http://85358.diarynote.jp/201708312013524319/>

欄外に

リ・ステラリアナ

って書いてある。

「あんたお気に入りのリアラ」ちゃんの本名とおぼしいが、

どんなキャラだったか印象が薄い。（^^;）

（「サキのお気に入り」という時点でレイの「お気に入らない」のは間違いないw）

(スカディステイアン)

---

<http://85358.diarynote.jp/201708312218437728/>

...スカディ! (@◇@ ; ) !

...こんなところにキャルの子孫が居たとは...ッ!

参照⇒ <http://76519.diarynote.jp/200611290025340000/>

(自分で書いてて今まで気がついて居なかった? (^^ ; )

超〜「裏」設定ッ☆)

(借景資料集)

(借景BGM集)

---

(借景BGM集)

『エスパッション』+『ジースト』

<http://85358.diarynote.jp/201702222058306230/>

(他いろいろ)

リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
7-6-0  
『ブラインド・ポイント！』

<http://p.booklog.jp/book/116540>

遠野真谷人

as

霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116540>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト